
傘泥棒は連鎖する

cokoly

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傘泥棒は連鎖する

【Nコード】

N1612D

【作者名】

cokoly

【あらすじ】

傘を盗まれた僕はコンビニの前で他の傘を持っていくかどうかという些細な悩みで躊躇していた。するとあこがれの優里が話しかけてきた。

傘が無い。

僕の目の前には傘がいっぱい詰まったコンビニの傘立てがあり、僕の背後では雨がざあざあ降っている。そして僕がここまでやって来た時に差していた傘は、傘立てからは消えていた。

おそらく、ほぼ間違はなく、誰かが持って行ったのだろう。

僕は、誰でも心に秘めているはずの、些細でありがちな邪心と良心の狭間で揺れていた。

「傘は天下の回りものです」

と後輩が言った言葉を思い出していた。

「特にビニール傘という物はみんなで共有するべき物です」

ヤツはのほほんとした口調で、それが当然、と言う顔をして言い切った。

確かに、ビニール傘に強いこだわりを持っている人間はあまり存在しないだろう。ワンタッチ式とか、ちょっと色がくすんでいるとか、そんな違いはあるものの、あらゆるビニール傘は『ビニール傘』として一括りにされてしまいがちだし、実際僕も何の気なしに他人のビニール傘を間違えてもって返ってしまった事はある。

誰でも傘泥棒になれるのだ。そして、そうなる可能性をみんな平等に持っている。

もし仮にその可能性を不可避のものとして公式に認め、「傘泥棒はしょうがないのだ」という事になったとして、それが社会的な問題に発展する事はほとんどゼロに近いのではないだろうか。

そんな事をいちいち考えている人間は居ないだろうが、世界中の無邪気な傘泥棒たちは頭のどこか片隅で無意識にそのような言い訳を自分に行っているに違いないのだ。

ビニール傘をなくしたら、他のビニール傘を使えば良い。という常識。

しかしやはり考えてほしい。

そうやって連鎖的に発生する傘泥棒たちの陰に隠れるように、間の悪い誰か一人は確実に持つべき傘をなくしてしまうのだ。

「ちよつとすみません」

僕が傘立ての前であれこれ考えていると、一人の女性が横から手を伸ばして傘立ての中から一本引き抜いた。僕は傘立てを利用する人たちの邪魔をするような位置に立っていたのだ。

「ああ、すみません」

ふと女性の顔を見ると、それは大学で同じ講義を受けている浜宮優里だった。

優里も僕の顔に気付いたようだ。

「伊藤君、だっけ？」

驚いた。彼女が僕の名前を知っているとは思わなかった。同じ講義を受けているとは言え、クラスは違うし、サークルなど、他に僕と彼女の接点になるようなものは無いはずだ。

「浜宮さん、だよな」

確認などするまでもなく彼女の名前は僕の頭にしっかりと刻まれていたのだが、僕はそんな言い方をしてしまった。僕は焦っている。動揺している。でも嬉しい。彼女が僕を知っていた。

「何してるの？ 傘立ての前で突っ立つちゃって」

「持ってたかたみたいなんだ」

優里は、あら、と言う顔をした。

「どこ行くの？」

「駅まで」

「私も。一緒に入っていきなよ」

そう言っつて優里はほんの少し傘を僕の方に傾けた。

こんな偶然があるなんて。僕はやはり安易に他人の傘を持って行かなくて良かったのだ。

「ねえ、もし暇だったら、ちよつと買い物に付き合ってくれない？」
と優里が言っつたので、僕はもちろん即座にオーケーした。

「良い傘だね」

と僕が褒めると、優里はちよこつと舌を出して、

「実は私も盗まれたの。頭に来ちゃって誰のか知らないけど持って来ちゃった」

と言つて僕にいたずらっぽい笑顔を向けた。

僕はほんの少し良心が傷んだが、優里の笑顔には敵わなかった。

```
>a href="http://novel.blogmura.
com/novel|short/"たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1612d/>

---

傘泥棒は連鎖する

2010年12月2日02時24分発行